

第二期 第三十九号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.10.20 定有堂書店 発行

昨日までの世界 奈良 敏行

新橋で歯をつつかれながら前衛短歌を知る

萩原 俊郎

着想の歪みを越えて

ワクサカソウヘイ

なぜ釣り続けるのか、湯ノ湖で考えた 吉田 海将

わたしはいかにして村上春樹の背中をまたいだ男と名のよろうになったのか

鳥居 貴彦

マヲ街歩き 芝野 浩貴

大江戸書肆往来 ムラカミヒロミ

坪井日記 ②② 齊藤 仁昭

鳥取自動車道が西へ延びて 山本千津子

鳥取あれこれ その三十八 内田 克彦

姿見 秦阜 梅林

魔女と靴下 ドラメリア

…… 編集後記



昨日までの世界

奈良 敏行

(定有堂 店主)

ここ近年の事件はスリッププレスだろうか。本に挟み込んであるスリップが廃止され消えつつある。はじまりは二〇一八年四月、角川文庫から突然消えた。事故かと思っただがしばらく遅れて、ファックスで説明の通達が届いた。

POS (販売時点情報管理) の普及で、紙のスリップが役割を終えたという理由だった。そこにはシヨートラ印刷(小ロット印刷)への未来も含まれてあり、売りっ放しにしたいという動機がみえた。発注をPOSレジデータのアルゴリズム(判断)に委ねている大型書店には、違和感のない制度変更だった。

アルゴリズムが有効なのはビッグデータの処理に際してだが、ちいさな街角の本屋である定有堂は、はじき出された形でシヨックだった。ちいさなデータのゆらぎの中で本の品揃えに努めているからだ。仕方がないので、私製のスリップを作りはじめた。その後平凡社がスリップレスに踏み切ったのには驚いた。違う事態が幕を上げ

たと思った。

筑摩書房からは今年の六月に「スリップがなくなると困りますか？」と来訪があった。その後十月から書店で書き込み用の白紙スリップを無償提供するという対応に収まった。悩んでいる姿がありありと感じられた。

定有堂はちくま文庫に限れば山陰で一番売上げている(2018.8~2019.7)。理由は文庫の森羅万象というテーマでちくま文庫に特化して力を入れているからだ。スリップを自分で集計し、既刊本を根気よく発掘している。P O Sレジデータとは全く重ならない銘柄の領域だ。データに忘れられた後ろ向き探書だからだ。スリップがなくなると、①この作業ができなくなる②売り上げデータを筑摩書房に送ることができなくなるので双方向性が失われる。ちくま文庫を中心に森羅万象を意図しているの
で、この世界観を読者と共有するために、ここ半年で文庫目録を一五〇冊ほどいただいている。双方向性が消えデータの裏づけがなくなると、こんなお願いもできなくなる。

時代はリスク回避のショートラン（売り逃げ）に向かう。今日一日が大事で明日のことは誰にもわからない。こういう未来がはじまっている。日銭仕事になっているのだろうか？

八月末に南陀楼綾繁さんが『地域人50号』の取材でお

見えになった。「人と話すとき、奈良さんは出版業界の用語をほとんど使わない。その代わりに『青空』『ピオトープ』『それからのはじまり』など謎めいた言葉を話す」と記される。はじめての指摘でその観察眼に驚いた。

紅旗征戎吾事二非ズという言葉があるが、状況がどう変わろうと、本が好きだから本を並べるだけで一直線に進んで一直線に終わるだけだ。この消息が『音信不通』なのだが、たゆまず月々刊行して三十九号になる。自分で何を書いたか忘却するのときどき抜き刷りを作って確認する。カフェで会話している折に、たまたま手元にあつて差し上げた事が二度ある。南陀楼綾繁さんと歸山健一さんのお二人だ。

先日歸山（かえりやま）さんから宅急便が届いた。開封したらこの抜き刷りが製本してあつた。背表紙のある青いハードカバーの本だ。

ショートランの反対は一期一会だと思う。歸山さんは一期一会を「かたち」にしてくださいと思ったのだと思つた。わたしもこの一期を功德としたかったので、鳥取の旬の「梨」をほんの数個贈つた。「じつは製本は知人に頼んだので少しお裾分けしました」と返事があつた。

その知人の方が関わつた書物に『本を贈る』（三輪舎）があつた。このご縁に再読した。初読のときには気がつかなかつたが、これは「昨日までの世界」の記録だ。十

人の「本」に関わる方々が寄稿されていて、心が解け合っ
て一つの魂の声に聞こえた。「本」への祈りだ。「本」
を見つめることによって「本」から見つめられている世
界だ。

《「たくさん売らなくていい」というだけで、こんな

に精神的な負荷がちいさくなるとは…》

《本とは、本棚にいらんだときに「背」が見えること

…》 《背がない中綴じの本は本棚に収まった瞬間に存
在がな くなってしまう》

《お客様が残していった「痕跡」を通じて、その心
の中をそっと垣間見ていく…》

同質の魂の声なので引用元はあげないが、「痕跡」は
スリップのこと。わたしは中綴じの冊子ばかりを長年作
りつづけてきているので、「背」の存在論には意表をつ
かれた。たしかにその通りだ。

いま出版流通の世界は「未来」へと前のめりになって
いる。でも今日一日だけを生き延びようとしている人た
ちにじつは未来はない。「未来」とはいつも「昨日まで
の世界」のことだからだ。紅旗征戒、つわものの消えた
あとには、昨日までの世界が喧騒を拭って露出する。

2019.09.22

定有堂東京支店 その⑧

新橋で歯をつつかれながら前衛短歌を知る

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

半年ほど前のある夜、電動ブラシで歯をゴシゴシ磨い
ていたら、一番手前の下の臼歯が、中ほどからあっけな
く折れてしまった。

単身赴任も長くなり、やはりカルシウムが足りないの
だろうか。しばらくやり過ぎしていたが、状況は日に日
に悪化してくる。

たまらず職場で「いい歯医者を知らないか」とSOS
を発したら、営業部長とその部下の女性が思わせぶりな
含み笑いを浮かべながら、「そりゃあ、あそこしかない
でしょ」。二人が通っている新橋の歯科医を教えてください
た。だが、そのニヤニヤは何なのだ？

ホームページを見ると、中世ヨーロッパのおどろおど

ろしい治療風景の絵と（どれも拷問にしか見えない）、ハイプリーマシんでラットプルダウン（ジム通いしていたから分かるが、広背筋を中心に鍛える筋トレ）に汗を流している男の写真。これが先生らしい。何だか、いかにもひとクセありそうな歯医者である。

◇ ◇ ◇
歯科医は新橋駅から歩いてすぐ。まずは口の中を隅々までのぞかれた。「この差し歯、安物だからいずれダメになりますよ。ああ：上も下も虫歯の予備軍だらけですね。それから虫歯に詰めたアマルガム、これ水銀が溶け出して有害なので、全部除去した方がいい」。もうケチョンケチョンである。「どうです、いっそ全部きれいにしては。半年かかりますが」。何だか、えらい話になってきた。

部下たちの怪しいニヤニヤは、どうやら、このこのツンデレ歯科衛生士の「情け容赦のないS度ぶり」のこころしい。ちよつと「ギヤル曾根」に似ている彼女（年齢不詳）に、長年たまった歯垢を除去してもらおう。「痛かったら、手を挙げてね♡」。チョー明るい声とは裏腹に、無情にもガシガシ、ドリルで削っていく：いやはや。

◇ ◇ ◇
待合室の壁にはアンリ・ルソーの「眠れるジプシー女」の絵、室内は静かにジャズが流れ、五十歳前後とおぼし

き歯科医は筋トレでがっちりした体格だが、なかなか知的で多趣味の人間のようだった。

付き合いが長くなると、治療の合間にいろいろ世間話もするようになる。と言っても、こちらは口を開けっ放しなのだが…。

「実は私ね、『短歌研究』という雑誌に、映画からインスピレーションを受けた歌人が詠んだ短歌の解説を連載しているんですよ」

「はー、ほーれるか（あー、そうですか）」

「今回は『去年マリエンバートで』（1961年、アラン・レネ監督）なんです、これが訳が分かんない映画でねえ」

「ははひもはれみて、はっぱりはからなかつた（私もあれ観て、さっぱり分からなかつた）」といった具合。

先生が解説しているのは、寺山修司らとともに前衛短歌の世界を切り拓いた塚本邦雄（1920～2005）という歌人。ところが素人には、もうさっぱり、なのである。例えばこんな風。

「ギムナジウムと花屋のあはひ泥濘の属領も味爽（よあけ）までに亡ぶ」

この歌も、先生の解説にかかると、『死刑台のエレベーター』（1958年、ルイ・マル監督）を観て、「アラン・ドロンが密通相手の夫を自殺に見せかけて殺すが、

エレベーターに閉じ込められ、花屋に置いていた逃走車まで行けずに、もろくも崩れた完全犯罪」を詠んでいるのだという。うわー、分らん。もともと難解な「去年マリエンバートで」などを塚本邦雄が詠んだら、もう銀河系クラスの難解さではないか！

◇ ◇ ◇

ところで私は新聞社の事業をやっていた関係で、短歌界に「ちよい噛み」してきた。現代歌人協会理事長の佐々木幸綱さんと女流歌人の小島ゆかりさんには、今も「大伴家持大賞」の審査員をお願いしている（二人とも冗談大好き人間）。亡くなった前審査員の河野裕子さんの夫、永田和宏さん（日本最大の短歌結社『塔』を主宰）は、「京都の大学の仕事場まで会いに行ったこともあるんですよ」。治療が終わってから先生に話すと、「えーっ、そうなんですか」と先生は見たこともない「フレンドリーな笑顔」を浮かべた。

その後は、塚本派の同人誌「玲瓏」をいただいたり、「友好ムード」のうちに治療は順調に進んだ（笑）。

しかしこの塚本邦雄という歌人、気になっていろいろ調べてみると、思わぬ「鳥取との接点」が見つかった。

商社に勤務していた塚本は、戦後まもなく松江に転勤した際、八頭郡の丹比に住む歌人、杉原一司と知り合う。通じるものがあり、杉原と同人誌『メトード』を創刊。

ところが杉原は翌年、わずか二十三歳の若さで他界してしまう（死因は調べても分からなかった。何か事情があるらしい）。

「ドン・ファンの指にて石化せし後の半裸像内にある全裸像」

杉原の作品は、まるで塚本が詠んだかのように似ている、というのが短歌界の評のようだ。塚本自身も、後に杉原への追悼として出版した『メトード』の復刻版にこのような献辞を捧げている。

「なほどどこかで生きてゐるはずのかつての同志にこの復刻版を献じ墓前に捧げたい。創刊は一九四九年八月十日、さらば短き夏の光よ」（「逝ける天才への賦」1991年）。杉原がいなければ前衛歌人・塚本はいなかったかも知れない。鳥取県歌人会の北尾勲会長（新聞社の先輩）はそのところをよくご存知らしいが、もつと多くの鳥取の方に知ってもらいたい話である。

そんなこんなで半年経過し、私の歯は真っ白、ピカピカになった。あの時、歯が折れたおかげである。まさに「人間万事塞翁が馬」「禍福は糾える縄の如し」。最近そう思うことが多くなった。

着想の歪みを越えて

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

この「音信不通」の本連載に、特に通底するテーマはなく、その月その月で思いついたことをただ書いていくわけだが、それでも一応「書く」という行為に抵触するようなコラムにしよう、というルールを設けていたりもする。

私は「書く」ことを生業としている者だ。だから「書く」という行為がいかなるものなのか、日々考え続けている者でもある。そして「書く」ことの本質というのは、なかなか捉まえづらいということを理解している者である。攫んだ！と思ったなら、あつという間に握りこぶしの隙間からにゆるにゆると逃げていってしまうスライムのごとき「書く」の本質を、それでもなんとかその時その時の感触点を記録しつつ理解していこう、というのが本連載の趣旨なのだ。まあ、あくまでざつくりとした趣旨ですが。

「書く」ことの本質とはなにか。文筆家であるメレ山メレ子の名著「メモントモリ・ジャーニー」にはこのよ

うな記述がある。

「『書く』という行為の本質は、孤独である」

まったくもって、至言である。執筆業を営んでいる者であれば、誰もがこの言葉に深く頷くことであろう。書き物をしている最中、私はずっと孤独だ。もし原稿が進まなくても、その苦しみを誰とも分かち合うことはできない。また、その原稿が誰かの糧になったという報告が届いても、その喜びを他者と完全共有することはできない。「ひとり」の筆先から始まり、「ひとり」の筆箱へと完結していく孤独な行為。それが「書く」の本質である。すごいことを言うぜ、メレ山メレ子。あと、なんなんだ、そのペンネームは。

それから、映画監督であるクエンティン・タランティーノは雑誌のインタビューでこのように答えている。

「『書く』という行為は、『書く』こと以上のことができる」

これにも深く頷いてしまう。そう、「書く」ことは、「書く」という行為を越えたことができるのである。たとえば私は、いままでに、おそらく千本以上の原稿に手を染めてきた。そして私は、それらを書き終えた瞬間に、必ず少しだけ新たな知見を得てきた。つまり、私がかもし「書く」という行為をデフォルトに含まない生涯を歩んでいたとするならば、いまここにいる私は約千個の知見

を持っていない、スポンジみたいな人間であったであろう。これは実におそろしいことである。いや、現状も海綿体のようにスカスカな人間なんですけどね……。

私の「書く」についての今月の考察は、こんな感じだ。「『書く』という行為は、最初の着想を歪ませ、思いも寄らぬ場所へと自身を導いてくれる」

アニメでいうところの、ストーリーボードみたいなののが、頭の中に常に浮かんでいる。それはつまり、コラムでこういう景色のことを描きたいな、とか、ルポでこんな世界を紡いでみたいな、とか、コントでこんな感じの場面を描いてみたいな、とか、そういうやつだ。つまりは着想点であり、それを元に私はPCに向かい、物を書いていく。ところが不思議なことに、書いているうちに最初の段落に現れたAの表現と、三段落目に現れたBの表現が化学反応を起こし、思いも寄らないつという化合物が生成されたりする。こうなると、まるで自分が自動筆記のマシーンになったようなモードが現れ、思考とか論理とかは彼方に飛び、またそこに「楽しい」とか「辛い」というような気分も登場せず、ただただ指先だけが動いていく。そして最初の着想は歪み、気づけば思いも寄らぬ原稿が誕生している。その時、目の前に広がっているのは、「なんだか知らない道に出ってしまったぞ……」という、呆然とした感じである。これ、物を書く人だっ

たら、きっと共感してもらえると思っている。

いま、「マンガの原作」という新しい仕事に挑戦している。最初に編集さんからひとつだけ、「あなたの描きたい世界を書いてください」というオーダーがあった。私がいま現在、マンガというメディアで描いてみたかったのは「芸能界と自然科学界、ふたつの異界の出会い」というものだったので、それをストーリーボードの中軸に据えながら、企画書を作成した。だが、書いているうちに、やはり思いも寄らぬことが起きた。登場人物たちが自由に動き始め、始めはAとBしかいなかった世界に、CやらDやらXやらがどんどんと自動生成され始めてきたのである。

そういえば、とある劇作家が言っていた。

「戯曲とは、作るものではない。掘り起こして発見するものだ」

もしかしたら、原稿も同じかもしれない。すでにそれは化石のようにどこかに埋まっていて、私たちはそれを慎重に掘り起こすようにして、発見しているだけなのかもしれない。

ともあれ、着想の歪みの先に現れるマンガの連載スタートが、他人事のようにいまから楽しみである。

なぜ釣り続けるのか、湯ノ湖で考えた

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

釣りに誘う秋。

なぜ釣り続けるのか。初めて一人で出かけたのは小学2年生。適当に糸を竿に結び、十数^{センチ}の小鮒を釣り上げた。45歳まで、何年かブランクがあっても、必ず釣り竿を再び手にしてきたのはなぜだろう。

中学生のころは、はやりのブラックバスを追いかけた。大学生、青春18切符で出かけた秋田の山奥で、天然アマゴの美しい魚体に見入った。スウェーデンに留学した際は、巨大なサーモンを夢見て竿を振り続けた（見果てぬ夢）。結婚して子どもが生まれ、一人ではなかなか出かけられなくなり、子どもを道連れにすることも。福井の九頭竜川では、念願のアユの友釣りをマスター。香川・小豆島では50^{センチ}のチヌに出会った。

9月下旬、千葉在住の両親とともにマス釣りで名高い、栃木・湯ノ湖に出かけた。実をいうとこの2年間、両親とはほとんど口を聞かなかった。理由を詳しく書くと、それだけで1800字を超えてしまう。気になる人もいるだろうから、年賀状に子ども（彼らにとつては孫）の近況をどう書くか、を巡り口論になったからとだけ書いておこう。

ここ数年、湯ノ湖を中心とした奥日光に通い、温泉やウオーキングを楽しんでいる両親と、一度は釣りに行ってみたいと思っていた私の思惑が一致したのだ。父とはあまり実りのある会話をした記憶がない。ただ、母も一緒だし、まあなんとかなるかな、と。

東京・築地の会社を午後7時ごろに出発、湯ノ湖周辺のひなびた温泉民宿に私がついたのは午後11時ごろ。かけ流しの温泉で一服した後、1時間かけて仕掛けを用意し、就寝した。

翌朝、心配だった台風はそれだが、どんより曇り空。でも、魚の警戒心が薄れ、釣りにはきつと良い天気だ。さつさと朝食をすませ、マイペースで食事をとる両親を残してポート小屋へ。ライバルたちがどんどん、ポイントへ向けてこぎ出していくが、父親はなかなか現れない……。いけない、いけない、こんなことで切れてはいけない、父と本格的な釣りに行くのは十数年ぶりなのだか

ら。

父のご到着後に、我々もボートでようやくポイントへ。眠気を我慢しながらつくった仕掛けと、竿を父親に差し出した。

お膳立てはすべて私だったのに、一番先に竿をしならせたのは父だった。湖面に浮き上がってきたのは、

Shining rainbow without sun!

山のカラフルな木の実をちりばめたような、30^{センチ}ほどのニジマスだ。でも、私が本命で狙っていたのは、ヒメマス。紅ザケの陸封型の淡水魚で、脂がのった赤身はきわめて美味で高価だ。その後、私がニジマス一匹を釣り上げ、ただただその瞬間を待ち続けた。

30分ほど後に、その瞬間がやってきたのは、またしても父だった。ニジマスと違い銀色に輝く魚体。ボートに少し寄せたと思っても、再び湖底の暗闇へ消えようとする姿は

Silver knife into lake!

どんなに願いを込めて、準備しようとも、努力が報われるわけではないのは、釣りの世界も同じなのだ。私のぼやきを聞いて、父の口元が少し緩んだ。

ささいな話をたまにしながら釣り続けた。私と同級生の〇〇は、中学のころは荒れていたが、今は立派なお父さんになったとか、90歳を超えた祖母は老人ホームだけ

はぜったい行かない、と言っているとか。しまいには、糸を切って逃げていった魚は絶対でかかったというお決まりのフレーズも。

結局、私がヒメマス1匹を追加。ニジマスも2人で5匹ほど釣り、正午には陸へ。私がヒメマスをさばいて刺し身をつくり、民宿の晩ご飯と一緒に楽しんだ。

釣りの良さは、自然の中に自分を置いて、少し立ち止まって思索を巡らすことができる、といつも思う。今回は、続かない会話の間を埋めてもらった。

本当は、現地で釣果が報告され始めていた、真っ赤な婚姻色に染まったヒメマスを釣れたかったが、今回はかなわなかった。来季には必ずと思い、これから紅葉でにぎわうであろう、湯ノ湖を後にした。

わたしはいかにして村上春樹の背中をま

たいだ男と名のるようになったのか

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

「レコードプレーヤーはいりませんか？」と近所のMさんが言い出した。家の改装ででた大量の本を処分したいと、もう9月の下旬だというのに汗をばたばた書きながら5箱の段ボールをふたりで運び終えたところだった。「レコードプレーヤー……」おもわず同じ言葉を繰り返してしまふ。今いる店の二階にも数ヶ月前にもらったレコードプレーヤーが埃をかぶって眠っている。店の二階、といってもそこは倉庫でもなんでもなく居住空間で、ふすま一枚隔てた隣の部屋には布団が敷いてあり家族が寝ているし、押入れにはまもなく出番を控える冬服や毛布がしまつてある。その押入れを塞ぐように段ボールが積み上げられ、とりあえず置かれた二台の本棚には本がパンパンに詰まっている。さらにさきほどMさん宅から運び出された大判の画集や図録がここに加わる。これ以上物を置いたら床が抜ける。

うーむ、とそんなことを考えていると「とりあえずもってきてますわ」とMさんが行ってしまった。二台のレコードプレーヤー。「アンプを買うべきです。そしてレコードの世界にいらっしやい」とたまにいく喫茶店HのマスターであるYさんがいついていたのを思い出す。京都市役所からすこし北に上がった路地裏でひっそりとがんに自家焙煎の珈琲を出すYさんの店にはレコードが壁面いっぱいにならんでいて、レコードのことはもちろん音楽がそもそもよくわかっているはいくはいつも呆然とその壁をながめ、「あ、ゴンチチってなんか聞いたことある人やな」とか思っているだけで、アンプの相場や安くで手に入る店をいろいろと教えてくれるYさんの言葉はほぼ頭にはいつておらず、結局アンプを買おうなどとは微塵も思っていないのだった。

Yさんの店からすこし南に下がるとJという中古レコードショップがある。ここに入り出すようになったのは古本が一緒にならんでいるからで、この店に来るとやたらと漫画ばかり買ってしまう。店主のKさんはまあなんでも受け入れてくれる人で迷惑だらうなと思うこともいったん相談してみることにしている。以前、古本とともに昭和歌謡のCDを200枚ほど引き受けてしまったことがあり、「まああずかりますよ」と返事をしつつ内心どかないしよと戸惑っていたのだが、その時もすかさずKさ

んに相談したのだった。Kさんは200枚のCDを驚くべき速さで仕分け、5枚だけ抜き取った。そして「今日まだ時間あるん？」と挑発的にいった。その言葉の意図するところがわからず妙に身構えてしまったほくにKさんは「三条大橋をわたったところにブックオフがある」と言い放ったのだった。結局200枚の昭和歌謡は一万円という驚きの価格で引き取られていった。

Kさんにメールをしてみる。「レコードプレーヤーも買ったんですが誰か欲しい人いませんか。」あまり時間をおかずに返事がきた。「あ、おる。」

二台ある、とは一切伝えていないし、もらったばかりのMさんのものは動くかどうかすらわからない。しかもなぜが浅川マキのレコードが裸でのったままだ。とりあえず二台のレコードプレーヤーを自転車のカゴに入れて出かけることにする。

JにつくとKさんはいなかった。せまいカウンターの中には店番のKさんがいた。事情を話し受け取ってもらう。いくらで引き取るとか聞いてますか？と店番のKさんは聞くがまあいいんです、と返事になっていようになつていないようなことをもごもごと言う。店内には数人の男性がいてレコードを眺めていた。そのまま帰るのも気がひけるので本棚に目を移す。この店はなぜか海外文学が充実していたり、出版されて数ヶ月以内の本が定

価の半額くらいで並んでいる。ぼーっと眺めているとレコードをみていた男性の一人がすっと横に立った。身長はぼくよりも低く短髪のその男が妙に気になったのは前日に自分の店の本棚でみた本の作者によく似ていたからで、毎年ノーベル文学賞の時期になるといふところである。その人の顔写真を目にする必要があるからなのだった。レコード屋が一堂に会した祭りに現れたのをみた、とか、領収書を「ムラカミで」といつて取っていく、とか嘘か本当かわからない話が京都のレコード屋の間で流れているのだ、とYさんはいふ。

といっても本物かもわからないし知らないおじさんに他人の店でいきなり声をかけるのもなんだかなとおもい男性が店を出るのを見送ることにする。見送つてからあやっぱり声をかけるべきだったかな、と後悔している。「じゃまた」と店番のKさんに声をかけ、Kさんは気づいていたんだろうかと思ひながら外にでると店の前の均一台に例の男性がしゃがみこんでいた。熱心に100円のCDを抜き取っている。店の前は通路が狭く、大人ふたりがすれ違えるぎりぎりの幅で、そこにしゃがみこまれるともうその背中をまたぐしなくなってしまう。一瞬躊躇するも「すいません」とちいさな声をだし、まだ一心にCDを物色する男をまたいで家に帰ったのだった。

マニラ街歩き

芝野 浩貴

(地球探検家)

日韓の外交状況がよくない。終戦記念日に海外で観た

NHKのテレビに令和天皇と安倍総理が映っていた。1981年

フィリピンは憲法で米軍基地を返還。日本は未だに辺野古

問題。私の祖父は戦死である。その後祖母が母親と叔母を

育てながらも、長女でもあったので十数名いた弟と妹の面倒

をみていたと知った時、祖母には恩返しをしなければと思っ

つつ、祖父は華々しく散ったのでなくて、飢餓かマラリアにや

られたのだろうかとも思っていた。祖父はフィリピン沖で亡く

なつたと聞いていた。台風から逃れてギリギリマニラの空港に

降り立ち、北を目指して歩く。車道はあるが歩道はないの

で車を避けるのに一苦労。犬の糞が道端に絶え間なく散在

する。電線が切れて目の高さまで垂れ下がっているので避け

ながら歩く。たまにガジマロのように垂れ下がった植物の根

の時もあるので紛らわしい。道路も舗装は完璧でなく、凸凹

だらけで、補修が追いつかない。『マンホールはなぜ丸いのか』は蓋を横にした時、どの角度でも穴より小さくならないからだが、マンホールの蓋ごと落ちる可能性もあるので、下を見ながら歩く。温暖化を意識しているらしく、グローバルウォーミングと書かれた小さな鉄枠に植物が所々に植えてあるのだが、水は汚いし、ゴミのポイ捨ても酷い。島国フィリピンは日本よりもゴミ処理に苦労していて、処理できないゴミ山の近くに住んでゴミを漁りながら生活してる人もいる。1970、1980年代に建てたであろうコンクリートや鉄板を素材にした家が壊れかけのまま、廃れた店の跡をセブンイレブンがそのまま使ってるだろうと思う場面が何度かあった。

住民の移動手段は、タイがトゥクトゥクでベトナムがバイクなら、フィリピンはジープニーと呼ばれる屋根の低いバスかトラインケルと呼ばれるバイクタクシーだ。自転車で駆動する自転車タクシーもある。7月に日本人の祖先を研究する海部陽介チームが台湾から与那国島200キロの丸太舟での航海に成功した。GPSや磁石を使わずに、月明かりや星や波の動きを頼りに移動した。私の場合、地図がない時の街歩きは、日本であれば寺・神社に頼るが、マニラでは教会・公園を目印に通りの名前を確認しながら行った。西の海寄りのロバス通りとハリソンからマビニと変化する通りに挟まれながら、リサール公園を目指す。後で知ったがエルミタ地区も通っており、夜は近づかない方がいい繁華街だった。早朝

にも関わらず、コルガールからもしつこく声かけられた。公園に辿り着き、国立図書館を見学しようとしたが、断られた。外国人は入館禁止なのかと問い詰めたが、理由は工事中だった。出稼ぎ王国フィリピン。公園の周りは、仕事を探したり、自分を売り込むためのプロフィールを書いた看板持つてアピールする人でごった返す。近くの国立自然歴史博物館でフィリピンの自然を勉強。フィリピンの森は1900年に70%、1989年に18%、2010年には6.6%と急速に減少。世界最多種の昆虫よりも魚の方がフィリピンは種類が多いのは喜べる現実ではない。公園の北にはスペイン統治の時に作られた要塞イントラムロス高い壁と堀で囲まれたがある。その中のマニラ大聖堂は8回も建て替えたことで有名な聖堂。地震や台風や津波に負けずに復活したマニラ市民の元気の素である。世界遺産のサン・オグスティン教会の後は中華街のランドマークでもあるビノンド教会へ。元々中国大陸の一部であったフィリピンは350年間のスペイン統治と第2次世界大戦の日本3年占領の後、アメリカ50年統治。1200万都市のマニラだが、85%はキリスト教。古道である曲がったオングピンストリート沿いに歩いて宿の近くのレクトへ。レクト通りは免許証や卒業証明書の偽造作りの拠点である事も後で知った。LRT、MRT(地下鉄はないが、路上電車)も経験しよう。フィリピン版Suicaのビーパークード100ペソ(20ペソはカード代)を買った時に、電車なら60ペソとペソをタクシーで1200ペソ

られたと嘆く日本人に道を聞かれた。電車も車も右側通行、エスカレーターも右に立つ。行きたい方向のホームと反対側のホームは繋がってなくて平行線は交わらない。遅れることもしばしばだが、フィリピンの人はじっと待つてる。大きな店や駅の改札を通るたびに荷物の検査をいちいち受けるので、都内の満員電車と違い、車両に乗るまでも改札に行くまでに検札所で長い列となる。飛行機をJRの乗り継ぎのように乗つてはいけない例えで理解されたい。東京で例える。LINE1とLINE3で山手線を成し、LINE2が中央線。LINE2と3が交錯するCUBAO 駅前のファーマーズマーケットでは、肉、魚、海老貝、海藻、野菜など充実しており、それだけでフィリピンは自活できるとは思う。バンコクのほぼ全ての人がスマホをついていたのに比べ、マニラの人のスマホの所持率は低く、携帯でさえつく時間は少ない。離国直前は日本人も多く訪れるだろうアヤラのショッピングモールに寄った。そこだけは先進国の都市のビルと変わらない。6月の大雨で蚊が大量発生してデング熱が蔓延していたことも滞在中に知った。廃車となった消防車や救急車に寝る子供もいる。25歳以下が人口の4割という若い国。教育の必要性を感じるが、まずは日本の南の島にて実践しているところだ。

大江戸書肆往来

ムラカミ ヒロミ

(フライング・ブックマン)

昭和五十年代半ば、初めて上京した時、是非見ておきたかったのが、できたばかりの八重洲ブックセンターであった。日本一の本屋、という触れ込みで、週刊誌の記事にもなり、事実それまで一位だった紀伊国屋書店梅田本店を抜いていた。店内に喫茶店があり、本が持ち込めるのも新鮮だった。

しかし、その後、三省堂書店本店、ジュンク堂書店池袋本店、紀伊国屋書店新宿南店などメガ書店が当たり前になり、さしものブックセンターも、そこらにある中規模書店とあまり変わらなくなってしまった。

三省堂は、新築開店直後に訪れた。各階は専門毎に分かれ、エントランス前の広場では常に催し物があった。地下にビアホールは珍しかった。大抵の新刊はここで間に合ったし、雑誌も他所では見かけないものがあったが、近年は売り場が縮小され、明らかに在庫数が減っている。

特に文芸書の凋落が著しい。その分、漫画やアウトレットのコーナーが大きくなり、雑貨や古書や眼鏡コーナーまである。大都会の大書店とて、書籍だけでは商売にならない時代になっているのだなあ、と慨嘆せずにはいられない。

近くに書泉が二店あり、ブックマートはサブカルに強い品揃えであった。コミックはここで大方揃った。かつては、靖国通りの高岡書店がメッカで、「発売の二日前に入荷する」「立ち読みは怒鳴られる」店として有名であったが、コミック専門店が珍しくなくなり、そのコミック自体求心力を失っている現状では、苦しいものがあるう。 (ブックマートも四年前に閉店した)

すずらん通りには、富山房書店と東京堂書店があったが、前者は閉店。後者はビル化し、その後のリニューアールで喫茶を併設した。規模も身の丈で、落ち着いた雰囲気と相俟って居心地のいい店である。

新宿には、高島屋スクエアに紀伊国屋書店新宿南店があったが、三年前、六階の洋書部だけを残して撤退した。大東京の人口を以てしても、あの規模の店を維持することは難しかったらしい。

渋谷は、パルコの地下に洋書のロゴスがあった。ビジュアル洋書専門店の先駆けであった。新着の写真集は、ここを探すのが早道だった。

洋書といえば、銀座のイエナにも良く出かけた。画集を探すなら、イエナと神保町の松村であった。今でもそうだが、国内の美術書は超有名画家ばかりで、マイナーな画家が一冊の画集に纏まることなど絶えてなかった。近年、展覧会と連動した図録出版などで、多少風向きが変わってきた面はあるが、逆に大手は有名画家からさえも撤退しつつあるようだ。かつての画集といえば、大艦巨砲主義か護送船団方式が常識であったが、いまやそれでは物置の場所塞ぎにしかないことが消費者に知れてしまったので、極力安手の手軽なものしか出さなくなってしまった。

そんな状況の中で、バーン・ジョーンズやミレイ、クノップやデルヴィル、モンス・デシデリオやピラネージといった主流から外れた画家の作品集を求めるには、この二店に詣でるしかなかったのである。この二店も今はない。

ホビー系のビジュアル本なら、青山に嶋田洋書があり、車やバイク、兵器や軍装、乗馬、喫煙といった主として

男の趣味系が充実していた。サブカルの走りのような店で、BRUTUSやPOPEYEの重要な情報源でもあった。

キラードリのワタリウム美術館近くには、ビルの中庭のような一風変わったたたずまいの中に、リリパットという海外日本の専門店があった。本当に狭い店だったが、珍しいものが沢山あった。ビジュ・ブックという言葉もあるくらいで、値段もピンキリ。英米より、東ヨーロッパでの出版が盛んな様子であった。残念ながら、三年ほど前に閉店してしまった。

嘗て血眼で画集を探していた画家たちの作品が、今や国内展覧会に当たり前のように並び、ワタリウムのショップ、BUNKAMURAのナディッフモダン、国立新美術館や東京都写真美術館、オペラシティのミュージアムショップなどには、美術洋書やグッズが汗牛充棟の様相である。まことに隔世の感と申し上げるしかない。

追記 この原稿の下書を書いたのは二年程前で、年次の確認をしつつ、念の為調べてみたら、嶋田洋書は二〇一五年に、高岡書店（コミック高岡）も今年の三月に閉店していた。何だか、書店版掃苔録みたいになってしまった。

坪井日記 ②⑩

齊藤仁昭

(長崎書店)

8月末日

神戸へ。ヘラブラウンジ周年記念月間のライブ。今年もトリで呼んでいただき恐縮至極。毎年会う音楽好きの男たち。と言うかおじさんたち。による怒号に包まれ無事にライブを終える。新曲も初めて演奏したが、失敗した。杉浦の書く曲について、彼の理想とするドラムを僕が演奏できないという状態で、申し訳ない。曲を書く側はやっぱり現代的なエッセンスもリズムに取り入れていく訳だが、追いつけないところがある。情けない。

ライブ後はMさんとYさんのDJで皆踊る。キーラーが振舞われ、バーテンダーS君が酩酊しいつものに裸になる。こんなに顔の綺麗でフロアに出て裸で踊って記憶を無くすバーテンを僕は知らない。どうやって宿に帰ったか僕も記憶がないが、明日は岡山でライブ。

9月某日

岡山へ。出演6組のイベント。出番が最後なので飲めない。飲むと演奏ができなくなります。昨日より少しいい演奏ができた。

主催の石原君と話するのがとにかく面白く、というか彼の話が止まらないのを聞いているのが面白く、夜更けまでのんびり打ち上がる。恒例の宿である、トリイググルというゲストハウスの部屋も快適であった。そしていつもなら翌朝に始発で帰って出勤なのだが明日は休み！ゆっくりしていきたいが、家に妻と子を置いて来ているので早めに帰るのは変わらぬ。

9月某日

文化通信主催のアメリカ出版事情視察旅行に同僚と参加し、ニューヨークのマンハッタンとブルックリンの書店や出版社を訪ねて話を聞いたり、見学したりしてきた。台風の影響で成田がだめになった日で、家を出てからニューヨークに着くまで五十数時間かかった。視察の様子を会社にレポートで提出したのだが、A4で三十枚、3万字ほどになり、ここにもいくらか書きたいのがどう書いたものか。追って少しずつ紹介できたらと思えます。ストランドブックストア、グリーンライトブックストア、マクナリー・ジャクソンブックストアが特に素晴らしかった。

9月某日

バンドのメンバーであり中学の頃からの友人佐藤が遅い夏休みで帰省。土曜に帰ってきたというのに火曜まで連絡してこないのはいつもの通り。待ち合わせも21時半と遅め。彼の実家の近くの居酒屋「うろこ」へ。親のことを話す。すっかりそんな年頃である。

お互いあまり酔わない程度で切り上げ、佐藤の通っていた小学校に行ってみる。門が開いていたので運動場を一回りしながら思い出話。雲梯にぶら下がってみたが、最後までたどり着くのがやっと。佐藤は体が重くなり過ぎていて進めず。要減量。

一周した後は坂を登って二人ともが通っていた中学校へ向かう。27年前にここで佐藤と出会った訳だが、初めて会った際、彼はなぜだか満面の笑みを讃えて国語辞典で僕に殴りかかってきた。あれは何だったんだらう。プールや体育館が新しくなっていた。ここでも運動場を一回りして解散。

9月某日

昼前に佐藤と待ち合わせ、あたりやと言う店にお好み焼きを食べに行く。ここも何年通っているだろうか。大盛りモダン焼きを食べる。うまい。

市内中心部のバスターミナルがあるところにサクラマチクマモトという新しい商業施設がオープンしたので見学に行く。おじさん二人にはあまり見所がなく…。カルディで安いビールだけ買い、東京に戻る佐藤を空港まで送る。

長い煩いを抜けて 橋の向こうまで

乾いた気分にかけて 橋の向こうまで

とても向こうの方まで歩いてゆける

悪い企みもやめて 橋の向こうまで

暑いも寒いも抜けて 橋の向こうまで

とても向こうの方まで歩いてゆける

春が来るように 風が吹くように

君に会いにゆけたら

何を話そうか どんなものを食べに行こうか

速いぞ速いぞ車 橋の向こうまで

止まった時計をつけて 橋の向こうまで

とても向こうの方まで歩いてゆける

変わった歌をきかせて 橋の向こうまで

曲がったり空を見たり 橋の向こうまで

とても向こうの方まで歩いてゆけるのに

何を話そうか どんなものを食べに行こうか

(ケバブジョンソン「アデイオス午後」作詞・杉浦真寛)

鳥取自動車道が西へ延びて



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

鹿野が近くなったと実感できた日、「鳥の劇場」の公演を観に行くことが目的だった。中国自動車道から鳥取自動車道へ。これまでは鳥取西インターから21号線に向かっていたが、今回は新しくできた鹿野のインターまで直進する。

ワクワクしながら運転していくはずだったが、西粟倉までは後ろの車にイライラさせられた。鳥取道はトンネルが多いが、そのトンネル内でライトつけてくれない。

「自分は見えてるからって、こっちにしてみればどこにいるかわからんやん、私のためにつけてよ〜」とブツブツつぶやいているうちにトンネルを出ると、緑の山と青い空と白い雲がぱつと目の前に広がってくる。あーきれ

い！そしてすぐまたトンネルの中へ。やっぱりライトつけてくれない。イライラ、あーきれい！と気持ちのアップダウンがトンネルの数だけ続いた後、道の駅「あわくらんど」の一般道から合流する箇所まで追いついてくれた。京都ナンバーか、関西弁が通じる相手やったな、ひとこと言いたかった。

前を走る京都ナンバー、あわくらトンネルは暗いと感じたのかランプをつけた。次のトンネルも。私には嫌みとしか思えない。後ろにいた時はつけなかったのに、前に来たらつけだすなんて。しかし、急に人の行動は変わるものなのか？疑い始めて何回目かのトンネルで気がついた。私のヘッドライトが反射してるだけや。その後、さらに判明したことには、赤いランプはブレーキランプ。おいおい、京都ナンバー、前の車を煽ってるやないの。

用瀬のトンネルあたりから車が多くなって、速度を落として皆が縦に並んで進んでいく。以前にも時速40キロの時があったが、今日は50〜60キロぐらい。地元の人々にとっては朝夕の通勤で普通のことだろうが、私にとつてはこの流れに乗って運転するのは難しい。上手くできると皆が同じ速度で進んでいく心地よさを味わえる。上空から見ると、テレビに映る帰省ラッシュの渋滞よりも断然きれいと思う。一車線の高速道路ならではの美しさ。

それは、日々、利用している地元の人々が作り出す美しさだ。皆が無事に職場に着き、帰宅するという何でもないようなことが自然となされての結果である。

車列を乱さぬよう注意しながら運転していたら、道の駅「かわはら」を通り過ぎてしまった。「私のかわはらー」と叫んでも遠くなっていくばかり。お気に入りの道の駅は帰りにおあずけだ。そのまま走り続ける。

さくあ、新しい道路、鳥取西からの路面は見た目もきれいし、タイヤから伝わってくる感じもいい。道路ばかりに視線を向けてはられない。「20世紀梨ふるさとトンネル」という名称が目に入ってきたからだ。地元の人には「20世紀梨のふるさと」でどのあたりかわかるのか。トンネル内は明るく、ライトと一緒に梨がぶら下がっていたりして、と思ったが、それはナシ。次のトンネルのネーミングにも期待してしまう。無事に浜村鹿野温泉インターで降りると、「道の駅西いなば気楽里」が待っていた。キラリと光っていたのは、地元の有機大豆から作られたお総菜やスイーツ。おいしかった！「鳥の劇場」までに寄り道する場所が一つ増えた。

この日はもう一か所、道の駅「かわはら」に寄らなけ

ればならない。平日の夕方、いつもの音楽は流れていなくて静か。私を含めて5人、ここぞとばかりに誰もいない畳にごろ〜んと横になるのもいい。自家焙煎のコーヒースタンドはすでに閉店、自販機でコーヒーを買って、土産物売り場にはケーキもあって幸せなひととき。お掃除を終えたおばさんに、もう一人がコーヒーを持ってきて「お仕事、お疲れさま」と話がはずんでいる。頼まれていた「因幡のしろうさぎ饅頭」を買ったら、もう一個お饅頭とうさぎのフィナンシェをおまけにつけてくれた売店の優しい女性。目撃するお客さんがいないこの時間ならではか、ラッキー、ハッピーな気分ですぐに就く。

しまった！肝心の「鳥の劇場」の感想が書けないまま字数に達してしまうのでこれだけ。今回は勝手にお土産として十月末からの演劇祭「BeSeJo」のポスターとチラシを持ち帰ってきた。「Beijing・Soul・Totori」の頭文字。そう、鳥取は演劇界では首都なんです。三か国の関係も鳥取が中心になればうまくいく、との願いを込めて私の宣伝活動開始。兵庫の演劇好きの人からは、これからは豊岡へ行けばいいやん、なんて言われるけれど。

鳥取あれこれ その三十八

内田克彦

(地域研究家)

矢部貞治は、近衛文麿とずっと一緒に歩んだと思われるが、それは、一九四六年六月、「昭和研究会」で一緒であった後藤隆之助から近衛の伝記を書くよう懇請を受け、「近衛公の生涯と事業については、そのほんの一面面に接触しただけで、近衛公について殆んど何も知らなかった」にもかかわらず大著『近衛文麿上・下』を執筆しているためであり、直接関わったのは、近衛の「新政治体制声明」のときだけなのである。

近衛内閣は、第一次が一九三七年六月四日から一九三九年一月四日まで、盧溝橋での軍事衝突による日中戦争の開始、「爾後国民政府を対手にせず」声明の発表、第二次が一九四〇年七月二日から一九四一年七月一六日まで、日独伊三国同盟締結、新体制運動、大政翼賛会の発足、続く松岡洋右外務大臣を外した第三次が同一八日から一〇月一六日まで、南部仏印進駐、九月六日の御前会議での「帝国国策遂行要領」決定、を遂行しており、

いずれも戦前日本のターニングポイントに該当する。

矢部は同著で、次のように初めて自らを登場させた。

「一九四〇年」六月一日午後、木戸の内大臣の親任式が行われている時刻に、近衛は華族會館で、後藤隆之助の紹介で矢部貞治（東大教授）と會つていた。

矢部は、その後近衛と頻繁に接触し、七月の第二次近衛内閣発足後の八月二八日の『日記』に次のように書く。

第一回の新体制準備会が開かれ、声明文は（略）夕刊を見ると大きく出ている。

僕の書いた文章が多少変つてはいるが殆どそのままで、而も根本の思想と原理は殆ど皆僕の頭から出たものなのだから何となく妙な感じで新聞を見、放送を聴いた。僕も歴史的な文章を一つは書いたことになる。

ここらで新体制の仕事は手を引き、これから大学の本職に従事することにしたい。

矢部は、この後、九月九日、一〇日及一三日と翌年一月三日に近衛と會つて助言しただけで、新体制を巡っての近衛との関係は終了した。

新体制運動・大政翼賛会をめぐる憲法論議で、佐々木

惣一が登場する。佐々木は、近衛の新体制声明に対して、九月下旬発行『中央公論』秋季特大號に「新政治体制の日本的軌道」を發表、「その運動の健全に進展せんことを、望んで已まない」とした上で、考察を試みている。

帝国憲法に依れば、特定の一の者が、恒久的に、我國の一般政治を担当するものと、定められることは、絶対に許されない。(略)昔時我國に於て見たる幕府の時代に在つては、特定の個人及びその子孫が恒久的に、我國の一般政治を担当する者と定められていた(略)これを称して、天皇の間接統治という。しかし、かかることは、今日は認められないのであつて、天皇もこれを為し給うことはない。

近衛も「幕府的存在」となるような疑念を極度に気にしつつも、一九四〇年一〇月一二日に「大政翼賛會」を發足させた。しかしながら、矢部が一九四六年一月二九日付けの「近衛新体制についての手記」に記述するように、新体制運動は「挫折」に終わってしまったのである。

私は近衛公の理念に依り、近衛陣營の人々が中心となつて、強力な筋金を通すことを望んだが、この期待は達成されなかつた。

一方、佐々木の論文に対して、東京帝国大学の同僚で矢部が憲法論議について「教へて貰」つた宮沢俊義や、黒田覚、大串兎代夫から「反駁」が出されたため、佐々木は翌年の『改造』二月號に「大政翼賛會と憲法上の論点」を書き、立憲主義に反することを明快に指摘したのである。

世間の憲法輕視の風ある一部には、次の如く考ふる者があるやうである。「(一)社會は動いているから、此の動きに應じて、政治も、革新されねばならぬ。(二)然るに、帝國憲法尊重のことに拘束されては、政治の革新を實行することが出来ない。(三)併し、帝國憲法の改正を為すことは容易でなく、又、濫りに之を為すべきものでない。(四)それ故に、帝國憲法を、政治の革新の實行するに便利なるよう、取扱ふべきものである。然れば、帝國憲法の解釈も、右の革新を為すに便利なるやうに為されなくてはならぬ。」と。(略)我國に於ては、社會の動きに應ずる為であつても、帝國憲法を離れて、政治の革新することを考ふる、の余地は存しない。これは許されない。

(以下、続く)

二〇一九・九・二八

姿見

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

I

コンパクトに永ひことちつと見入つてゐた女、徐にパフを手にはたひて居たかと思ふと塗りたくりはじめた：そして仕上げの口紅。

「かう見られたひ」「かうは見られたくなひ、絶対に」「此処はどうあつても潰しておかなくちやあ、エイエイ」終ひには、蟻を潰すうちまるで仇敵でも見つけたやう、ヒールで刺すのだらうか？見ず知らず、他人の意思の推移さへまざまざ見せ付けられるバツの悪さ：なんとも有りの儘、本能と見栄、虚像・實像綯い交ぜに、ベージュの仄かな煙の中交錯する。

II

車両は、通勤・通学の時間帯。程々には混み合つてゐて：黄色な金切り声で何やら喚く、部活に夢中の男子中学生。夏休み親子連れ。海へ山への観光客。季節不問はアベック……かう云つた景色に渾然と溶け化粧姿も気にならなひと云へばさうかも知れなひ。然し、そんな中「衆人」の視線前提で当人、尚も手を動かし、即席女造りに余念は無い。

III

女は明眸。齡26〜32といったところか？其の瞳は何かしら濁り肌が重ひ。此の年頃なら強みの筈の初々しさを全く欠ひて「性」許り独り歩き。職場での地位、此から会ふ男達に此の行為は何かしら意味の深いものなのだ…。

IV

不意に私の胸に去来した2つの場面。山田五十鈴と杉村春子が各々鏡台の前に繕つて、どちらも仄暗ひ中、女の顔と手許り二十日鼠よろしく忙はしなく動ひてゐた：台詞のたった一節も、題名はおろか監督も…話の筋さへすつかり失念して居るのに、モノクロームの画面一杯艶

やかな色彩の妙と、手や目の細やかな動きの永ひ時を経て今も印象は強烈。

同じ「化粧姿」だと云ふだけ、他に何の共通項も無ひアトランダムな記憶。

銀幕の双つのシーンは女を、つまりは人間を「役者」が演じ、或る時間の中に人生を描き「見せた」ものだった。

V

其のノーブルな光景とは違ひ、目の前に繰り広げられる「女の化粧姿」は、此の人が向かう先迄に、本来済ませておくべき行為を一つやつつたと云ふ、唯其れだけの事。云ってみれば、食事も摂りたひけれど、時間が無ひので無理に食糧と水分は補給した、何を食べたかも定かでは一みたひな最早営みとも云へなひ行為そのもの。浅ましさをわざわざに「公開」する、かの人のライフスタイルだらうか？否それ以前単なる無思慮？

VI

マイルス・デイヴィス擬き。暗いブラウンで、瞳の全く窺へなひ巨きなサングラスをかけた件の女は大学前、雑

踏の中に消へて行った、案外颯爽と。折から台風の齧したフェーン現象で、茹だるやうな暑さが尚続ひてゐる……。

2019. 08. 09

今回の一枚

M. デイヴィス「ボギー&ベス」(G. ガーシュウィン) with G. エヴァンス Orch.

M. デイヴィス Trmp, Flhr etc rec. 1958. 07. 22~08. 18



魔女と靴下



ドラマメリア (座敷わらし)

欧米では「魔女の一撃」と言うらしい。いわゆるぎっくり腰のことだ。Hexenschuss。この言葉を知ったときは「おお、なんだか格好いい響きだなあ」と中二ごころをくすぐられはしたが、実感はなかった。しかし、いざ自分がその一撃を受けてみると、……なるほど、これはたしかに魔女だ。

きつかけは特に何ということはない動作だったのだ。当日は集団演武のリハーサルがあった。朝から鈍い痛みはあったもののその程度の違和感はよくあることだったし、進行役だったので、あまり気に留めずに動き始め、刀を持った手を振りおろすと同時に、片足立ちで踵を蹴りだした。ポーズを取ったところで、ズギヤッ!ときた。雷に打たれたような、あるいは電撃が走ったようなという形容がぴったりの一撃。ぎっくり腰は初めてだったが、「これはやってしまった」と瞬時に悟った。そのぐらい強烈だった。

それからしばらく、よちよち歩きの生活を送っている。靴を履くのも、洗面台で口をすすぐのも、自転車の鍵を外すのも、あらゆる腰を屈める動作に支障をきたし、不便きわまりない。そして、不便を通り越して存在に疑問を感じるのが、靴下。ふにやふにやと伸び縮みして、自分の手で引っぱらないと装着できない、このアイテム。……なくなってしまうばいのに。

靴下にはひそかにこだわりがあったのに、瞬時にして不要物に宗旨替えをさせてしまう。ぎっくり腰とはおそろしい。



・編集後記:

音楽劇を観に行き、ヒロインの歌声に聞き惚れました。しかし途中で襲う睡魔。大学時代はなぜ一時間半起きていられたんでしょう。不思議

ドラマメリア(編集長)

『地域人50号』大正大学出版会(10~10頃発売)は本屋さん特集。南陀楼綾繁さんに取材いただきました。南陀楼さんは10、13(日)に松崎(倉吉市)で一箱古本市。民俗学者の山本志乃さんとトーク。

奈良敏行(発行人)